

弥栄之郷共同体日記抄(1)

本誌八月号の「共同体情報」に載ったように、備北百人委員会の何人かのメンバーは岡山県備北の地を離れて島根県弥栄村の新しい土地に入植した。この文章は「この怒りを創造的情熱へ」と題された彼らの日記から抄出されたものである。

7月1日 ついにやってきた。吟・鉄治が先発隊として弥栄之郷共同体に、第二次備北共同体運動の新たな第一歩を印したので。カヤぶきの屋根、カマド、掘りごたつ、ススで黒々とした天井……。便所と風呂は作り直さんとあかなあ。それにしても三年間使っていなかったわりには、意外ときれい。しかし、家の周りは草ぼうぼう。あの辺に鶏舎を、あの辺にはシイタケのホダ場を……。想いはかけめぐる。

心配していた電気が今日灯いた！これで、ラジオを聞けるぞ。まずは、人間様が住めるようにと、室内の整理から始める。

7月3日 床を補強する仕事と、家の周りの草刈りを同時に始める。床板は、ほとんどそのまま使えた。役場から土地購入に協力してくれている経済課長が様子を見に来てくれる。

昼から保安林の件で村の農林センターに行き、また土地登記の手続のことで司法書士を訪ねる。ついでにその足を浜田まで飛ばし、草刈機を購入。

7月4日 購入予定地が保安林に入っており、保安林解除の手続を進めていたのだがどうも解除が困難になり意気消沈。最初の挫折となるか……。チクショウ。

話し合いの結果、現在休耕田に入っている七反の水田を借り、保安林に入っていない二反の畑と一町の山地はそのまま購入することに急拠方針を変える。

7月8日～10日 備北からのかなりに大がかりな引越。京都・大阪・広島からの救援部隊が、トラックその他で到着して仲間は一〇人になる。二人だけの生活から、はじめて脱却できて、弥栄之郷共同体は急にぎやかになる。それよりも、これであるやうく、畳の上で寝ることができそうである。

第一便は大坂から持ってきたものや、畳資材など、第二便は鶏が中心、第三便はシイタケのホダ木とその他モロモロ。一番心配だったのは、鶏が備北・弥栄間約九時間のトラック輸送に耐えるかどうか。結論：六〇羽の圧死。ムム。

鉄治が近所のおじさん二人に手伝ってもらって処分する。死体をみただけでムカツと吐きそうになるのを押えて、内臓を取り出す。京都・大阪へ持って帰ったり備北の今井さんにあげる分を除いて、近所の人に一羽二百円でも買ってもらおう。四カ月の鶏だが、けっこう肉がついていた。

それから、特筆すべきこと、有線電話ができました。一回線の九番です。弥栄之郷共同体に来られる人は、浜田から石見(いわみ)交通バス安城(やすき)で終点まで来て、近くの有線でこの番号を呼び出し

てくれば、シロタクが迎えに行きマース

7月12日 山陰集中豪雨。熊さんは京都へ帰れなくなりました。浜田へ出る道がズタズタに切断され、大木が道の真中に倒れたりしている。村の人と一緒に、共同体のメンバー四人も復旧作業に出る。

7月20日 SCIIのボランテア、スウェーデン人のベンが帰ってくる。備北以来約一カ月半ぶりかな。その間、山岸会や一燈園で生活・労働してきたらしい。共同体観が少し変っていた。「共同体に住んでいる者はみんないへんなエゴイストだ」ということをしきりに繰り返していた。気になったが、この共同体はちがうことをへたな英語で説明した。

怪力のベンが来て、これからの仕事が大変助かる。

7月21日 役場の経済課長が島根新聞の記者とNHKのカメラマンをつれてくる。「過疎地帯に若者が入るのは珍らしいし、集中豪雨で暗い話題が多いなかで地域民に希望を持たせる」とかなんとかの理由らしい。



マスコミには強い反発があったが、変に追い返して役場の人に变にカングラレたり、迷惑をかけたたりするのを心配して、仕方なく取材に応じる。もうこりこりだ。

7月24日 他の仕事が忙しかったため、シイタケを放っておいたら、大部雑菌が目立つようになった。早くホダ場を作って移し変えなければ。

吟は鶏の遊び場を作る。ベンとはじめは溝堀り、鉄治は草刈りをする。

7月29日 昼過ぎ、大阪からコンチャン・和代・弘がぐつたりと疲れて到着する。少し休んだ後、すぐに新しく川のそばに作っ

たホダ場にシイタケの原木をみんなでリレーに移す作業をする。

今夜は総勢七名。夕食がにぎやかになりました。それにデザートのスィカもありました。

夕食後、備北共同体運動と弥栄之郷共同体の当面かかえている問題について話し合う。話はそれで、「玄米メシを食うことが革命なのか」とか、「無農薬栽培信仰とアクチュアリテイ」の問題にまで発展。後者の問題としては、①消費者の意識の変革、そのための学習運動がまずなされなければならないということ、②それと農業技術としての問題、の二点がその困難性として出された。

7月30日 コンチャンが台所をみちがえるように美しくしてくれた。

夜のミーティングは八月キャンプの具体的な相談。それをさっそく百人委内報「起て、寝るを牛よ」に書くことにする。

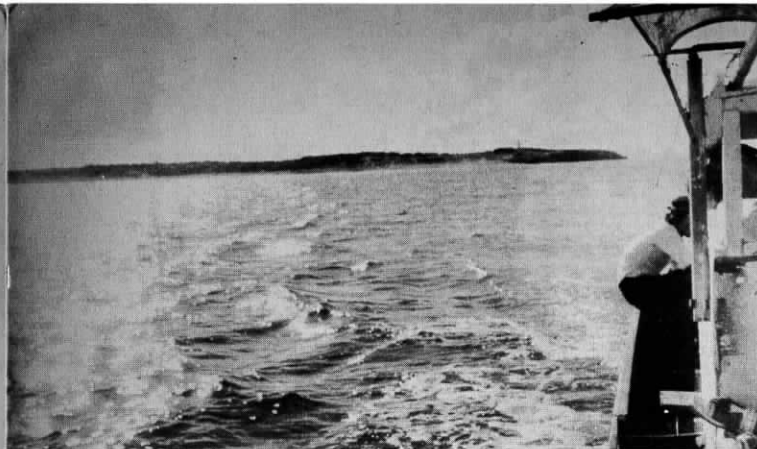
(この八月キャンプの報告は備北だより六号に詳しく載せてあります。連絡先は——大阪市東成区玉津二丁目 東成玉津郵便局 留 備北百人委員会)

畑地共有のユートピア

沖縄の久高島

水津彦雄

(『日本のユートピア』の著者)



□神秘的伝説□

澄みきったエメラルドの海上に浮ぶ、平たい細長い島。周囲約八キロ、面積八・九五平方キロ。この久高島に渡るには、沖縄本島の馬天港から、毎日午後三時に出る船に乗る。わずか五トンの小船で、波にゆられて約一時間二〇分。船賃は九〇円。一日一回(日曜は二回)であるから、日帰りはできない。逆に、久高島からは朝の八時に船が出るから、島の人たちは日帰りが可能である。筆者は六六年、六七年、さらに七二年と、ここを三回訪れたことになる。

白い砂地にみられる刳舟の群れ。濃いみどりの亜熱帯植物がなつかしい。今ウニがとれる季節なので、白い砂地には幾つかの天幕がみられる。近寄つてのぞくと、数人のグループが、子供をまじえ、熱心にその殻むきをしている。さて、この部落というのは島の南部にひとかたまりになっている。戸数一〇三戸、人口四八〇人。若い人は殆んど出稼に出ているので、島は子供と中年以上の人ばかり。

彼らの日常生活は神々と共にある。と云つ

て、ここには視覚に訴える神の像や堂々たる神社が存在するわけではない。きわめて素朴な原始宗教にちかひものが、生きつづけているのだ。ねずみいろの石垣で囲まれた家々。

仏桑草の紅い花も顔をのぞかせる。これらの家々の間を走る小路は迷路のようで、うっかりすると堂々めぐりする。感心なことには、この小路を子供たちが毎朝清掃するのだ。

ここには小・中校(両方あわせて、生徒数一五〇人)と診療所とがあるだけで、郵便局も駐在所もない。お巡りさんが必要ないほどに平和でどかな部落ともいえる。日用雑貨の店が六軒、医薬品を売っている店が一軒あるだけで、喫茶店も旅館もない。それで、訪れる人は公民館に泊まることになるが、こことて四部屋しかないから、満員のときは、部落の何軒かの家に素泊りさせて貰う。一泊七〇〇円。食事は区長さんのとこで営む店屋まで出向いて来て、その奥さんにお世話になる。もっとも学生のばあいは、学校の校庭でキャンプしているのが幾組も見られた。筆者のばあいも、今回は公民館が満員なので、家族と離れてひとりいる医師の家に泊めて貰った。彼は戦時中ラバウルの病院にいて、戦争の悲惨さを味っており、今でも亡き戦友をひそかに

に思い出すと云っていた。

この島に伝わる神秘的伝説を、先ず紹介しよう。それは唯一の資料である『中山世鑑』によつた。

※

昔、天城にアマミクという神がいた。天帝がアマミクを呼んで「この下に神の住むべき霊所がある。未だ島になつていなくて残念であるから、その方降りていって島をつくれ」と云われた。アマミクが降りていって、霊地ではあるが島になつてないのを見とどけると再び天に上つて、土石草木をくだされば島をつくりましようとして上げた。そしてそれらを貰い受けて、幾つかの島をつくつたのである。その中には久高島も入っていた。ところが数万年たつても人も生ぜず、これでは神の威光もあらわしようがないとあつて、再び天帝にお願ひして人間の種を乞うた。天帝が御子の男女をくだされたのである。

この二人の間に陰陽の和合はなかったが、吹き通う風によつて女神ははらみ、三人の男と二人の女を生んだ。長男は国王すなわち天孫氏。次男は諸侯すなわち按司の始め、三男は百姓の始め、長女は君々の始め、二女は祝女の始めとなつた。

□原始への郷愁□

当時の民は農耕を知らず、禽獣をとらえ、また果実を拾つてたべ、火食を知らなかった。アマミクは天へ上り、五穀の種を乞うて下り、麦、粟、黍の数種を久高島に蒔き、稲を知念大川の後に玉城の受水走水にまいた。

かように云われているので、久高島は沖縄民族発祥地、また五穀の発祥地として貴重な存在なのだ。

さて、住民の部落は島の南部にひとかたまりになっているが、そこを通りぬけると、小道はキビ畑(あとで聞いたが、このキビは利用されていない)や空地や原野の間をぬつて、延々と続いている。この島にはハブがいないので安心して歩けるが、歩き廻るとどこがどうなのか、さっぱりわからない。突如としてジャングルがひらけ、見覚えのある線香立てがあり、一つの霊地が顔を出す。神がたつた今まで居て、ちよつと立ち去つた名残りさえ感じとれる。

つぎに、西海岸の絶壁を訪れるなら、そこには巨大な墓の群れがある。七〇〇年前のものだ。無気味さや陰気くささが感じられない。

それどころか、カラッとした明るささえ覚える。かつてこの島では風葬が行なわれていたのだ。まゑに訪れたとき、岩と岩との谷間に骨つぼと遺品らしいものが散在しているのを見届けたことがある。島の言葉でいうなら、後生なのだ。打ち返す波はなにも語ってくれはしない。こちらはまだ歩きたい。知識のためでない。観光が目的でもない。ひとりわけもなくさまよい歩く楽しさ……。

つぎに、岩壁にそって曲りくねった石段を降りていくと井戸があつて、島の女の子たちのざわめき。彼女たちの体をふいている姿に出くわし、はっとした。

再び途を引き返し、今度は東海岸を目指す。この島の幅は短かい。キビ畑をぬい、亜熱帯樹の林を突つ切ると、突如として明るい砂浜が顔を出す。黄金の壺（五穀の壺）が流れて来たという伝説のある伊敷浜なのだ。太陽が直角に突きささる。まぶしさに眼がくらむ。この島ではひとかたまりの部落と野菜畑を除くなら、あとは全部が原始のまま残されていると云つても過言ではない。すばらしい魅惑！ 都会にては求めえない原始への郷愁が静かに波打ってくる。

◎畑地は部落の共有物◎

久高島の畑地は約九万坪で、パーセントによる配分はつぎのようになる。

ノロ地（祝女の世襲地） 三・五％
ニーチュ地（根人の世襲地） 一・二％
ワク地（百姓地、人民地） 九三・九％
その他 一・四％

ここで問題にするのはワク地であるが、実際に耕作されているのは約六万坪とみられている。名目上は個人はか何名の所有地となっているけれど、現実には部落民全体の共有物として昔から維持されてきた。沖縄では明治三年の「土地整理」まで、共有地の定期的地割制度がおこなわれていたが、「土地整理」の結果、共有地は私有地化し、今なお共有制の残っているのは、この久高島だけである。男子が一六才になれば一地を得、六〇才になれば村に返すという、一種の班田収授のような制度で、田村浩「琉球共産村落之研究」の中では、これを地割制以前の、琉球古代の遺制であるとみている。

ところで、ワク地は一〇組に分けられ、各組は一五地からなるので、六万坪を一五〇で

割るなら、一地あたり約三六五坪である。ここで一〇組の名とその所属戸数を表にまとめよう。

組名	所属戸数
大石組	12
城屋組	13
時田組	14
仲中組	13
屋家組	14
川上組	15
伊美見組	12
前下組	14
算盤組	13
伊堅組	10
計 10 組	130 戸

ここで所属戸数の一五に満たないところは、おそらく島を一時離れ、親戚にあずけてある家があるためである。前回六七年に訪れたときとくらべるなら、そのときよりもさらに一三戸減少していることになる。

また、ある家が一つの組にだけ所属するとは限らない。たとえば二つの組、または三つの組に所属している家もある。であるから、実際の戸数は一〇三戸となる。さらに、畑地が一カ所にかたまつておらず、とびとびで、ある家は一地すなわち約三六五坪が割り当てられ、これが二〇カ所にも分散している。肥えた土地、やせた土地を公平にわけける手段としてえらばれたらしいが、第三者には畑仕事

のやりにくさも考えられる。しかし、現状のままがやはり民主的で公平な配分なのであるうか。しかも、隣りとの畑地の境界は、単に小石をならべ置いてあるにすぎない。他方、一つの組に所属する畑地にしても、一カ所にかたまっているのではなくて、島の方々に分散している。したがってこれらのことから、家に対する畑地の割当てと、組に所属する畑地の割当てとが、たがいに複雑にからみあつて細かく分散している図が想像されよう。

さて、組とは何なのか。その由来、その意味について、部落民の人たちは知らない。浮田典良「沖縄久高島の土地制度」では、組について「組は近隣集団ではない。血縁関係で結ばれているわけでもない。……組は、同じ区画の耕地を互いにわけ合つて耕作しているというだけであり、社会集団としてあまり大きな機能を果たしてはいないようである」と解釈している。組には親という役職があつて、一年交替にて女が当たるのだ。

現在、部落としての最近一年間（七一年七月より七二年六月まで）の公けの収支決算書によると、収入（区費、公民館費、雑収入、その他）一六三万七五四円。支出（手当、渉外費、電話料金、雑支出、その他）八〇万

三九七七円。したがって相当の繰越金が見込まれていることになる。

◎維持される共有制◎

この制度は、戦前と戦後とは配分方法に変化をみせた。戦前においては男一六才より六〇才までは耕作権があるので、該当者には一地ずつ土地が分与された。しかし、実際に耕作するのは女に限られていた。もし六〇才を越したばあいは耕作権をうしない、部落にかえす。即ち、六〇才になった人の分を、毎年正月五日に、新しく一六才になった人にゆずるのが原則であった。とは云つても窮屈なものではなくて、多少の融通は認められていた。たとえば、男の子三人と父親とでは四地分の権利があるが、それを二地分に遠慮して貰うとか、また父親が六〇才になつても、男の子が一五才であれば便宜的に一年延長するとかである。

戦後になってからは、これまでの不合理を是正する意味で、はっきりと家単位で配分するように改められた。即ち家族の人数を考慮して、少ない家には一地、多い家には三地といった配分法である。と同時に、男は農業に

タッチしないという従来の習慣がくずれた。海の仕事が男の本職にはちがいないが、畑仕事の忙がしいときには手伝うようになった。もしある人が離島して畑の権利が空いたとき、そのあとをどの家に割り当てるかは、区長、婦人会長、及び一〇組の親の合議によって決めている。現在のところ、畑に対する島民の欲求はそれほど強いものでなく、耕されずそのままの畑も少なくない。

昭和初期、床次内閣のころに、この畑地共有制を廃止して交換分合をおこない、個人所有にしよつたという動きがみられた。個人所有であれば、なんらかの事業資金調達の際に、その担保にもできるからであろう。しかしその反面、土地が有力者の手に握られるとか、あるいは全くよそ者の手に渡る危険性にもさらされる。このことについて、部落常会では熱心に討議がなされた。おそらく人間にとつて共有の畑地が残されてあることは、よそに出稼ぎに出ていても、万一失敗したばあいは、故郷の島で最低の生活保障が待っているという実質的ならびに精神的安定感につながるものがあるにちがいない。常会では最後に票決したところ、ほぼ三分の二にあたる人々が共有制の現状維持に賛成したため、この制

度は現在まで続いている。

ところで今回訪ねた際、区長さんからの話では、六五年に共有としてあらためて登記されているが、これがどうも農地法にひっかかるらしいので、現制度を維持するために、いま「字有」にする話が持ち上っているという。

年中行事とイザイホー

この島の年中行事はすべて神と関係があるので、神職が世襲あるいはその他の方法で、次のように決められ、生活の中に生きている。本土で神職というイメージから受けるものと、久高島のそれとは全く異なる。ふつうの人がお祭りのときにかぎって神職につくと云った表現が当たっている。祭りを行なうウドンミヤーにしても、写真のように、中が全くがらんだりの小さな建物にすぎない。素朴そのもの。原始宗教であるから、ご神体といったものはない。しかも年中行事が多いわりに、神がかりとか、運命を占うとか、かかる職業の人間が見当たらないのも、ここの信仰形態の特色であろうか。

年中行事には七大祭を数え、関係者はその日には仕事を休んで参加せねばならぬ。しか

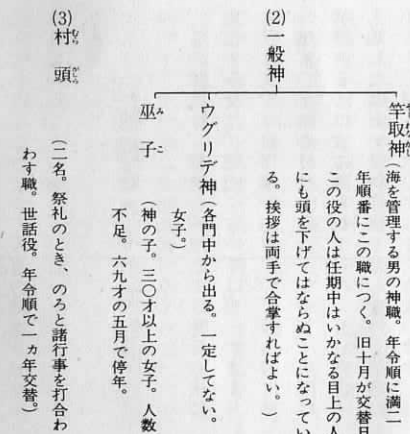
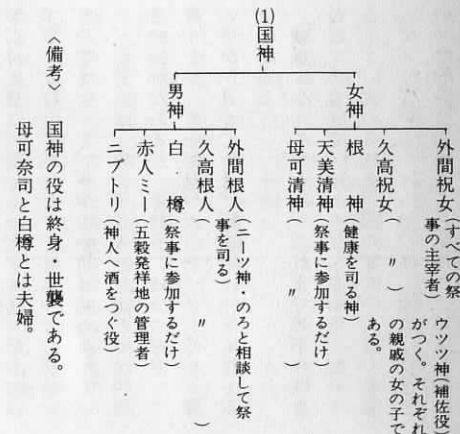
健康祈願。

七月—マミキ大祭。お米のお酒を造って、海神に豊漁を祈願。

八月—お酒を供え、全島民の健康祈願。
十月—マミキ小祭。大漁の感謝。ソーレナガシの交替の儀式を行なう。

また、一般に知られてるものにイザイホー祭がある。十二年に一度、年年の旧十一月十五日から四日間、ウドンミヤー（御殿場）で神職にある者や部落民監視の下に最も厳粛に執り行なわれる。この儀式には三〇才から六九才までの島の全女性が参加する。が、三〇才から四一才までの女性（ナンチュと呼ばれる）が主役で、彼女たちがはじめて参加し、巫子になるための儀式と云ってよい。七つ橋といっても地面から約三センチの高さだが、これを渡る際に、不貞を働いた女は転げ落ちるといわれるところから、巷間では貞操試験などと呼ばれる。もちろん、根拠はなにもない。

四日間の行事は、第一日—七つ橋渡り、第二日—円陣舞踊、第三日—洗礼式、第四日—アrikヤーメ網引き、と云った順序。最近では六六年暮れに執行され、当時のマスコミにぎわした。



回転機迎える神々の島

知念村は、沖縄でも貧しい村に属する。久高島はこの村の十二の区の一つで、政治的には中間に属し、役人といえはこ出身の村会議員と区長の二人だけ。しかも議員は島に住んでいないから、島の行政面での仕事は区長さんが全部背負っている。現区長は、筆者が五年前訪れたときと同じ、内間新昌氏で、部落民からの信望はきわめて厚い。なおここは政治的には保守派の確固たる地盤であって、革新支持者は他から来ている小中学校のわずかな教師たちにすぎない。

久高島には水が少ないので水田はなく、すべて畑である。約九万坪のうち使用されているのは約六万坪。まゑに訪れたときはサトウキビ栽培が主たるものであったが、これを七〇年からやめてしまった。畑が適してなく、輸送費も高くつき、わりに合わないからだ。現在は売れゆきのよい、スイカ、大根、エンドウ、アズキが主たる農作物である。

戦前においては農業は女、漁業は男と、完全分業がまもられていたが、戦後においては、畑仕事の忙がしいときは男も手伝うようにな

し他の人にはその義務はない。近年においては、主に老人連中が参加するだけらしい。日取りは旧の十五日内外のミツノエ、ミツノト、キノエ、キノトを佳き日として、祝女、根人の神人が決めることになっている。

正月—マブツチ祭。麦と芋でつくったおみきを供え、麦の豊作と男子の健康祈願。

三月—麦のお初を供え、その感謝と女子の健康祈願。

五月—マブツチ祭。粟の豊作と男子の健康祈願。

六月—粟のお初を供え、その感謝と女子の健康祈願。



った。しかし、すぐに換金できる漁業が一家の生活を支え、男の主たる仕事であることには変りない。

藩政時代には島の男たちは一六才になると唐船（中国へ通う帆船の貿易船）に乗る掟があり、鍛えられた。あるいは薪・材木などを運搬する山原船に乗り組み、大島・尾久島方面まで出かけた。八重山カツオ出漁は明治末期から、またマグロ延縄は大正初期から開始された。

現在、漁業に従事している島の男たちのふりわけは、

(イ) 八重山を根拠として近海へ出漁する地カツオ漁船に乗り込む者、二、三〇人。

(ロ) 那覇泊港から出る三隻の船にて、マグロ延縄に加わっている者、一〇人。

(ハ) エンジンつき二人乗り舢舨を所有し、自営漁業を営む者。殆んど一人で運営しており、これが二八隻。えび、たい、あじ、めばり、あゆご、うに、もずく（海藻）が採れる。

また、久高島はえらぶうなぎの産地としても知られている。宮古や八重山のとちがつて、赤あぶらで値も高い。皮革製品用に、あるいは強壯剤として珍重されている。しかし、このうなぎは誰でも捕れるものではなく、とれ



風景ある砂浜のりく

る場所とその権利は伝統的に受け継がれ、確保されているのだ。即ち、(a) 小島でとれるのは外間根人の収入。(b) 前岬のえらぶがまでとれるのは、久高のろと村頭二人のもので、三人で平等に分ける。ここが一番とれ、年間一〇〇〇斤と言われる。(c) 西海岸数カ所をとれるのは、久間のろに取得権がある。

ところで、島の将来の発展策はどうなのか。筆者が前回訪れたときとのちがいは、水道がしかれたことであるが、あとはたいして変わっていない。内間新昌区長さんは観光事業の確立を強調された。現在、徳仁港で港整備の工

事中であるが、これを海洋博までに完成させる。そして大型の漁船や二〇トンの乗客運搬船が入れるようにする。また、部落の出資で旅館をつくる案も出ている。ここでは、那覇の郷友会（まえの那覇市長西銘氏はじめ、有名人が多い）とも密接なのだから、その実現を期待したい。

どこの地域でも若い人たちが郷土に定住しなからないのは、時代の流れであって、それなりの理由がある。安泉松雄氏（久高の新制中学設立の功労者にて、郷土史研究家）から興味深い話を聞いた。

「一般高校進学希望者はきわめて少なく、すぐ役立つ技術を身につけるために水産、工業、畜産関係の高校進学者が圧倒的に多いですね。ここ四、五年の変化です。」

「風葬は八年前まで行なわれたが、いまはありません。」

筆者が今回滞り、受けとめた感じでは、部落を担っているのは四、五〇代の人たちだが、公共事業実践の熱意がまだ足りない。日々の労働のきびしさばかりでなく、島育ちのせい。たとえば老人天国であろうとも、若者たちをひきつける新しい要素の開発が目下の急務にちがいないのだ。

シャローム！ 我々クファル・マサリックグループは今の処二人程風邪に悩まされている位で、みんなは残りのキブツ生活を楽しんでいきます。

キブツ便利

一人一人がキブツの生活に慣れそして我々日本人同志の共同生活も大部慣れてきて、どんな人とも一緒に生活できるような雰囲気なので、とてもよかったと思います。私

個人の主観になるかもしれませんが、やはり一人の人間を知ることとは並たいていのことではないことを、ここキブツでの共同生活から知ることができました。各自、イスラエルへ発つ前の心境は十人十色の目的をもってきたのかもしれませんが、共同生活から得る人間関係の本質を知っただけでも大変な収穫だと思うのです。

まもなくエイラットへの旅行が予定されています。アメリカのボランティアといっしよです。知らない地への旅だけにみんな楽しみにしています。

これからの期間は行事が多く、たちまち日が経ってしまうような気がします。それぞれがこれからの身の振り方を考え始めていくところです。

クファル・マサリック（名和房枝）